

災害に備えるために

班ごととマップで 班ごとと助け合い



住民流福祉総合研究所<木原孝久>

埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷1476-1

TEL 049-294-8284

[第1章] 災害用・班ごとマップ

(1) どこでも「3つの壁」を越えられない

災害がこれだけ頻発しているのに、災害時避難支援体制がいまだにできていない地区が少なくありません。理由は何か？

- ①支援対象者が手を挙げない（登録を拒否する。「放っておいて」）。
- ②支援者が見つからない。探すところまでもいっていない。
- ③登録者の情報は「プライバシー」が怖くて使えず、金庫に閉まったまま。

(2) やり方を変えたら？

「できない」と言っても災害はやって来ます。「これならできる」方法を考えなければなりません。

① 班ごとの避難支援にしたら？

班では、お互いに顔見知りで、誰が誰と交流しているかが分かっています。支援者はすぐに見つかります。



② 班ごとにマップづくり

自治会全体となると、自分のことは話したくないとなるでしょうが、班内だけのマップづくりなら、今更隠しようがないでしょう。それに災害が起きたら、この人たちに助けてもらわねばならないのですから。

③ マップの場で、「放っておいて」という人の支援者も探す

「私のことは放っておいて」と言われても、だからと放置するわけにはいきません。マップを開けば、そういう人だって、本人が見込んでいる相手はわかるので、いざというときは、その人に関わってくれるようお願いしておけばいいのです。

④ 足元に自主避難所を探そう

とりあえず班として避難する場所を決めることも大切です。最終避難所へは、班全員の安全が確認されてから、ゆっくり行けばいいのです。

(3) 「班ごとマップ」のつくり方

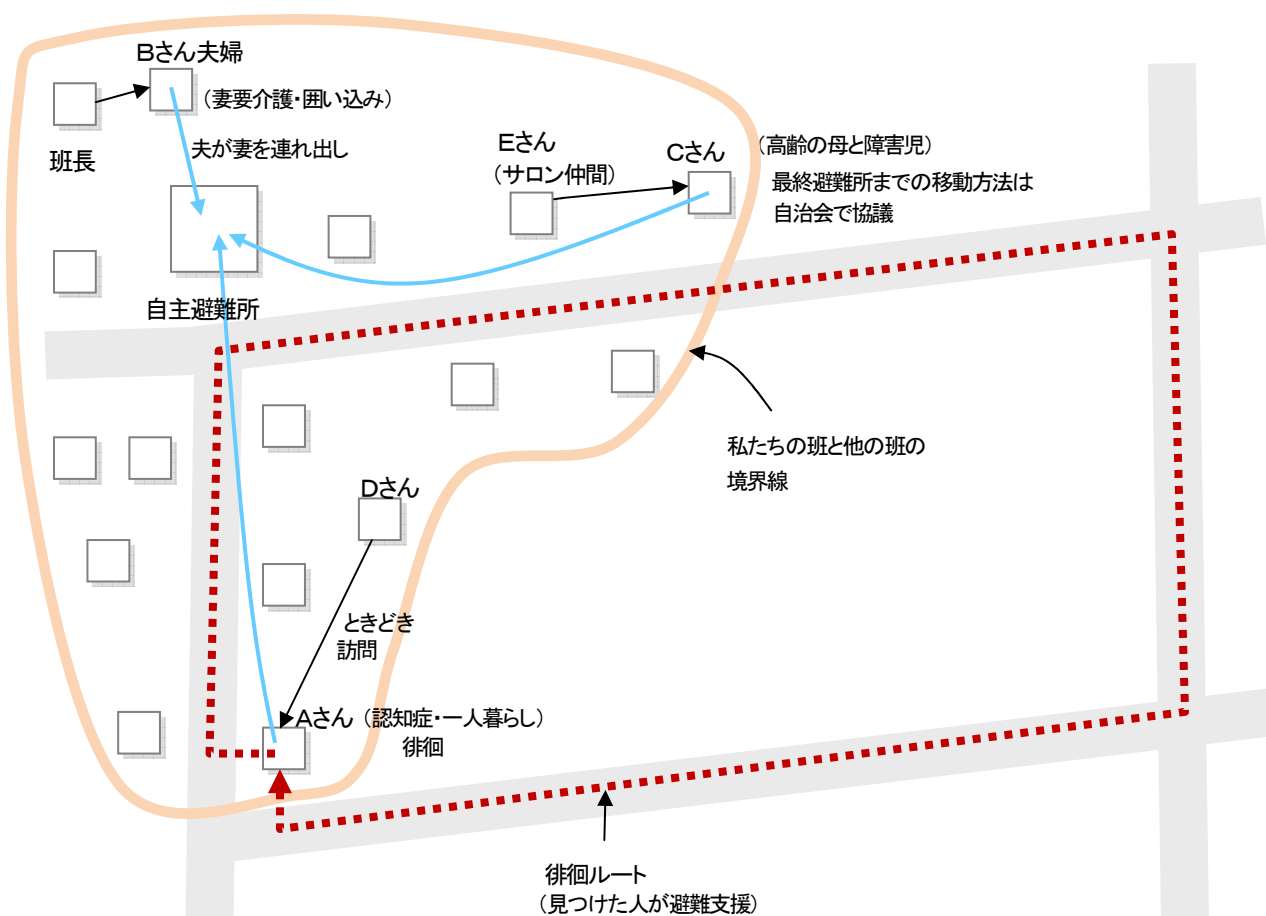
「班別マップ」を作る場合の標準的な方法を以下に並べてみましょう。

①自治会の主催でマップづくり集会を開く

一枚のマップに自治会員が寄り集まるのではなく、趣旨説明が終われば、すぐに班ごとに分かれることになります。

②班ごとに分かれて、マップを広げる

班のメンバーが一人や二人では駄目で、一定人数が揃わないとできません。マ



マップは模造紙大で、手作りでもできます。それに太いマジック（数色）を用意。班が入り混じっている地区では複数班が合同でマップ作りをしてもいいでしょう。

③気になる人の「気になる」状況を出し合う

お互いに隠し事なしに情報を出し合ひましょう。

④気になる人に普段誰が関わっているかも調べ、避難支援者を決める

本人は誰を見込んでいるかが大切。隣の班の人の方が、当人に近いという場合もあるでしょう。

⑤一人で助け出すのが難しい人は、誰と誰で移送するかも考える

寝たきりや重度障害の人の場合、車いすやリヤカーなどの機材が必要です。しかも班内の人だけでは足りないという場合もあります。看護師など保健医療の関係者の手が必要な場合もあります。そういう人材が近くにいないかも探します。そして、班単独では避難支援が難しい人については、あとで自治会で集約して、あらかじめ対策を考えておきましょう。

⑥最悪の場合は、誰かれ構わず助け出すことにする

災害が起きた時に、班の中の誰が現場にいるかわかりません。避難支援をしなくても、自主避難所まで自力で来られる人が多いはずです。各自が自主避難所まで行き、来なかった人を迎えに行けばいいということも考えられます。

⑦班内外の身近な場所を自主避難所にする

マップづくりの中で、自主避難所も決めましょう。班のメンバーが一つの避難所に集まるのは距離的に無理があるとすれば、何グループかに分かれて、違う場所に避難することもあり得ます。大事なことは、班メンバーが「すぐに行ける」場所であることです。緊急事態ですから、だれかの庭でも構いません。

⑧普段から班内のふれあいや助け合いを盛んにし、絆を強めておく

避難支援者と対象者が、普段から日常的に交流しておくこと。次いで班として、ふれあいイベントをするなどして、絆を強めておくことです。

⑨避難支援・誘導などで気になることも話し合う

班として避難支援・誘導をする際の問題点、留意点、自治会と話し合うべきことなどを、書き留めておきましょう。あとの全体集会で役に立ちます。

(4)「班ごとマップづくり」の記入表

班ごとマップづくりの結果を記入する表を紹介しましょう。気になる人一人一人について、①「災害時の支援が必要な状況」、次いで②「その他の気になる状況」。これは、次の福祉課題の抽出の時に役立てるための情報です。③気になる人と「交流のある人」、④最終的な「災害時支援者」の4項目を記入していきます。

<班ごとマップ記入表①災害版>

気になる人	①災害時支援が必要な状況	②その他の気になる状況	③交流のある人	④災害時支援者
①Aさん	一人暮らしで認知症・徘徊あり	食生活の問題あり。火の始末も心配	Dさんが時々訪問	Dさん。徘徊時に見かけた人も
②Bさん夫婦	老々世帯で妻が要介護	夫が単独で介護。人を家に入れない	近くにいない	夫が連れ出し。隣家の班長も当面支援者に
③Cさん母子	高齢の母と重度の障害児。作業所に通う	子供の将来	Eさんがサロン友達	Eさん。障害児の搬送は自治会と協議

上記とは別に、避難支援マップを作って気がついたこと、避難支援の課題が出てきたら、下のような欄を設けて記入し、自治会での全体集会で発表しましょう。

<避難支援の課題・記入表>

課題	その内容	考えられる対策案
認知症の人の徘徊ルートが班外に出た時	たまたま「その時」班外を歩いていた時どうするか	徘徊ルートにある隣接班に協力を求める
障害児の最終避難所への搬送法は？	自主避難所までは何とかなるが、最終避難所へは？	車両を使った連絡・避難支援法を考える（自治会全体で協議）

[第2章]福祉用・班ごとマップ

災害用マップを作ったら、ついでに福祉課題も考えたらどうか。「気になる人」の福祉課題も出し合い、とりあえず班としてできることを検討するのです。

(1)「災害マップ」の中で福祉課題も探る

①福祉的な関わりの必要な人や、住民の住みづらさの問題も

災害マップと何が違うのか。こちらは福祉問題一般を扱います。住民の誰が気になるのか、その人にどういう福祉課題があるのか、それにどう関わったらいいいのか、また地域問題もあります。住民にとっての住みづらさの問題などです。

②その問題の解決策も一緒に

その問題をどうやって解決したらいいのかを、支え合いマップづくりを通して考えるのです。解決策のヒントはマップの中に隠れているかもしれません。

③とりあえず班としてできることを考える

問題の解決には、自治区や市町村域の関係者にも関わってもらう必要がありますが、とりあえず班でできること、考えられることを中心に話し合しましょう。

(2)福祉課題と対応の記入表

福祉課題のテーマと取り組み方を記入する表を紹介しましょう。「気になる人」とは、先ほどの災害時の対応表と同じです。災害時に避難支援しなければならない人であると共に、福祉課題を抱えている人でもあるのですから。その一人一人について、①「対応すべき課題」、②「班内で対応すべきこと」、③「自治区で対応すべきこと」、④「市全域で対応すべきこと」の4つの項目が並んでいます。

この中の①「対応すべき課題」は、前の表の「災害時の支援が必要な状況」と「その他の気になる状況」を併せて、改めて福祉的な意味合いからの気になる状況と対策を羅列していきます。

その上でその課題に誰がどう対応すべきなのかを考えて、その人・組織の所属圏域の欄に記入していきます。②は、どちらかと言えば班内で対処すべき事柄です。③は自治区で対処した方がいいもの。自治会や民生委員、あるいは自治区で活躍している各種ボランティア、福祉推進員等のいずれかが該当します。④は「市全域で対応すべきもの」。市当局や社会福祉協議会、校区も含めます。地域包括支援センターやケアマネジャー、事業所、企業など幅広い資源が関係してきます。

ただ、班内だけではそこまでは記入できないでしょうから、とりあえずは班内で行えること・考えられることに限定して記入していけばいいのです。そして、その後自治会全体としての検討の場で、自治区や市町村域でできそうなことも、みんな考えてもらうのです。

<班ごとマップ記入表②福祉版>

気になる人	①対応すべき課題	②班内で対応すべきこと	③自治区で対応すべきこと	④市全域で対応すべきこと
①Aさん	食生活。火の始末。徘徊と普段の見守り。	班で協力して火の始末と見守り。	町内の有志で配食サービス。	班巡回型・認知症サポーター研修
②Bさん夫婦	夫のストレス対策。妻の生きがい対策	民生委員、ヘルパー等とケア会議	要介護者もサロンの仲間	夫の地域デビュー講座の開催
③Cさん母子	障害児の能力開発と日常生活での介助	介助含め支援課題を母と協議	子ども会への参加を母と協議	作業所と協議。能力開発の可能性を探る

<事例の解説>

①認知症の一人暮らし女性の場合

Aさんは一人暮らしの認知症の女性ですが、班でできることは、手分けして火の始末を確認したり、安否の確認をすること。自治区では、食生活の問題に対処するため、この際食事サービスを検討したらどうか。市全域の課題としては、認知症の

人が増えているのですから、認知症サポーター研修を班ごとに実施していくことも考えるべきです。

②妻を介護中の老々世帯の場合

B家は老々世帯。要介護の妻を囲い込んでいます。民生委員らと班内でケア会議を開いたらどうか。ケアマネやヘルパーも加える。自治区では、妻の生きがいや夫のストレス解消に、サロンに奥さんを誘い出す。要介護者を受け入れるサロンであることを確認。要介護の妻を囲い込む夫の問題は市の共通課題なので、夫婦が元気な間に夫を地域デビューさせる事業を実施したらどうか。

③障害児がいる老親の場合

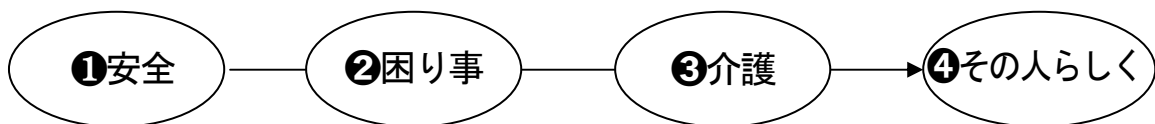
高齢の母親にどの程度、子の介助の負担がかかっているのかを調べて、支援策を考えます。自治会は子ども会に障害児を受け入れられないかを検討。市域は、子供が通っている作業所と協議して、この子の能力開発の可能性を探ります。

(3) 「気になる人」の「気になること」とは？

支え合いマップでは、「気になる人」探しをしますが、では「気になる」とは具体的にはどんなことなのか。その人の安全さえ守られればいいのかというのなら、「気になる人」はほとんど出てきません。対象をもっと広げるべきです。

①4つの「気にすべきこと」

「気になる人」のことを考えるとき、以下の4つの項目を考えましょう。



①「安全」は当然、考えますが、それだけでは不十分。②その人に困り事はないのか。③介護サービスは受けていても、サービスに該当しない問題があるのでは？④「その人らしく」とは何か。厚労省は、福祉が目指すべきことについて、こう言っています。「どんなに重い要介護になっても、住み慣れた地域で自分らしく生きていけるように」支えようと。認知症でもサロンに入れてほしい、寝たきりになって

も畑に行きたい、という願いを叶えてあげましょう、ということです。今は大部分の要介護者が「自分らしい生活」は諦めているでしょう。それでは困るのです。

②対象別の気になること。例えば…

- ①一人暮らし高齢者（食事はどうか？ 引きこもりの人は？ 買い物や通院は？）
- ②高齢者のみの世帯（夫が介護する場合、妻を困い込んだり、虐待していないか？）
- ③老親と息子（息子に仕事はあるのか？ 要介護の母を虐待していないか？）
- ④要介護の家庭（介護者にストレスは？ 要介護者の生きがいは何か？）
- ⑤施設入所者（時々里帰りしていないか？ 地域活動に参加できているか？）
- ⑥デイサービス利用者（地域のサロン等に入れてもらっているか？）
- ⑦認知症の人（徘徊の見守りはできているか？ 地域グループに入っているか？）
- ⑧障害児者（職能開発は行われているか？ 地域の仲間に入れてもらっているか？）
- ⑨ゴミ屋敷・猫屋敷・騒音（本人と親しい人はいないか？ 本人の願いは何か？）

(4)対応策を考える時の留意点

①簡単に関係者に委ねない。班内の助け合いでがんばる

問題は夫々の班内から発生したのですから、まずは班としてできることはするという姿勢が必要です。簡単に自治区や市町村に委ねないということです。

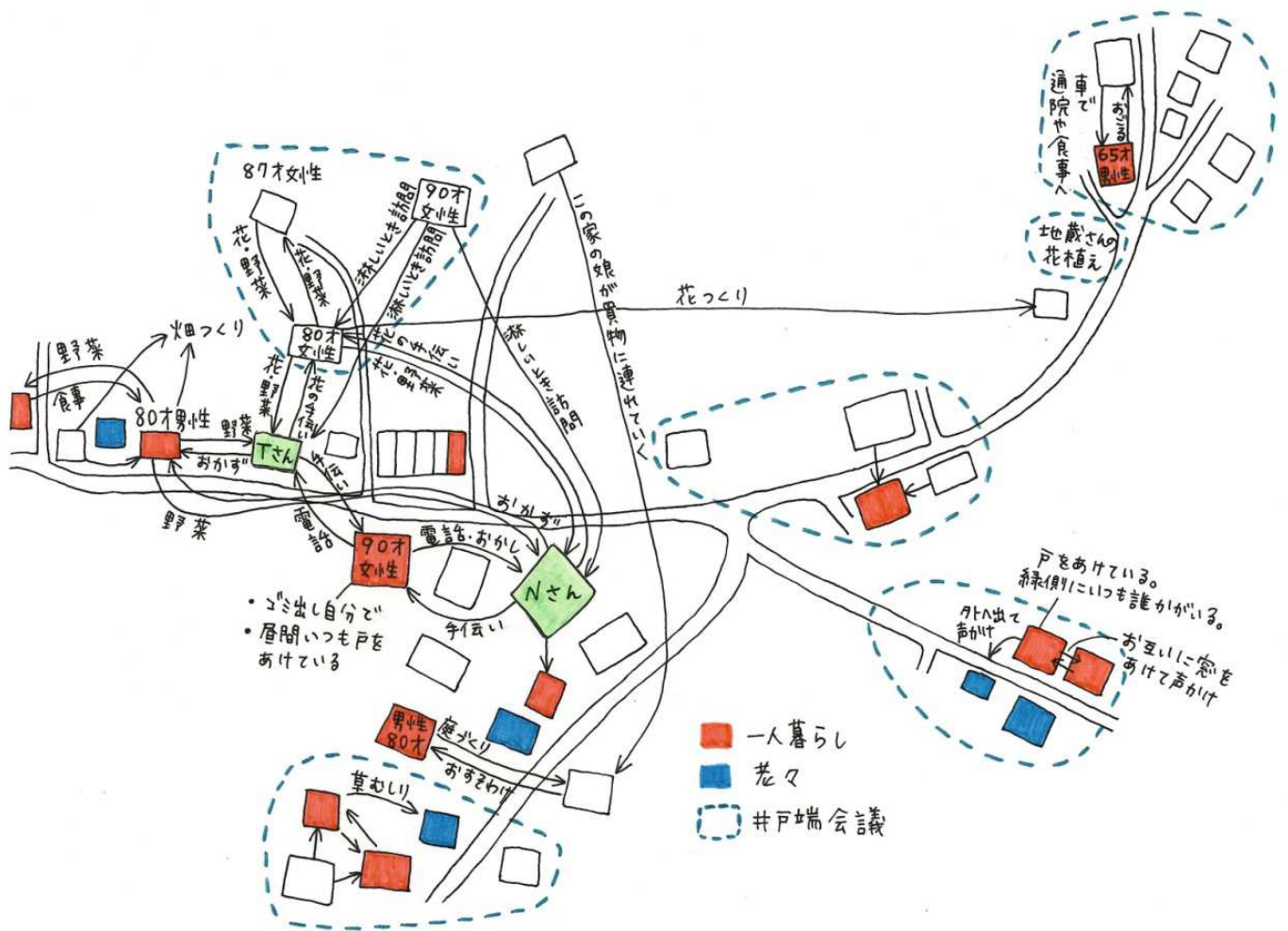
②マップ上で解決のヒントを見つける

マップ上で災害時の支援者を探し出すように、当事者の問題を解決できるヒントも、マップ上で見つける努力をすべきです。ヒントはどうやって探すのか。

- ①当事者は何らかの解決努力をしているはず。それを大事にしましょう。
- ②周りの人も何らかの支援行動を取っているかもしれません。
- ③その問題の解決につながりそうな人や活動があるかもしれません。介護人材が必要な場合、元看護師などのプロや家庭介護経験者もたくさんいます。

③住民の「助け合いの流儀」を理解しておく

住民はどんな風に助け合っているのかを知らねばなりません。住民には住民なりの助け合いの流儀があるのです。それを理解しておきましょう。



<上のマップで見えてくる「住民の流儀」とは？>

①天性の資質の持ち主の世話焼きさんが中心。

2人の大型世話焼きさん（緑色）がご近所福祉のキーマンになっています。

②相性の合う者同士で個別に助け合い。要援護者からのお返しも。

助け合いはおすそ分けとお返しの繰り返し（双方向の矢印のある個所）で、食事や送迎サービスまで行われています。ただただでなくお返しもしています。

③要援護者も相手を選んで、助けられ努力をしている。

一人暮らし高齢者が、いつも戸を開けている、外へ向かって声を掛けるなど。「寂しい時に訪問」が2人います。ちゃんと相手を選んでいます。

④要援護者同士も助け合っている。

一人暮らし同士がお互いに見守り合ってもいます。

[第3章] 自治会による総括マップ

ここからは自治会の仕事です。班で作った2種類の記入表をもとに、一つは災害時対応の自治会としての全体構想をまとめます。もう一つは、気になる人一人一人、またその全般の（各層別）取り組み課題もまとめます。

(1)自治会として総括的なマップづくり

班のマップづくりでやり残されたこと、自治会全体としてやるべきことを、自治会全域を網羅した住宅地図をもとに考えていきます。以下のような段取りで進めていきます。

①各班のリーダーが集合。福祉関係者も参加。

災害マップに参加した人たちがその場で一か所に集合する方法もあります。リーダーとは班長になりますが、今回は福祉の取り組みも一緒に扱うわけですから、そのテーマに合致した、班の世話焼きさんを選んでいいでしょう。

②自治会全域をカバーする住宅地図を用意。最低限の必要事項を転記。

といっても、班別にマップに載せたことを全部転記する必要はありません。個々の要援護者をだれが避難支援するかは、班内のことと割り切ります。班では対処しきれない要援護者（避難支援者が見つからない人と、寝たきりや重度障害の人など）に限って、全体マップに記入していきます。ついでにその人の支援方法や留意点を班から聞き取ります。自主避難所も自治会として知っていた方がいいでしょう。

③自治会としての総合的、最終的な災害時対応をまとめる。

各班から出された「班で対応しきれない人」の対応方法や、避難支援の課題を集約し、全員で協議した上で、自治会としての災害対応の全体構想をまとめます。

④全員で福祉課題への対応表の空欄を埋めていく。

災害対応とは別に、各班がまとめた福祉課題の対応表をもとに、個々の気になる人ごとに、空欄になっている部分（特に自治会や市町村域で対応すべきことを中心）の対応策を議論し、記入していきます。

(2)自治会は「班ごと助け合い」の仕掛け人

①なぜ「班ごとマップ」なのか？

本冊子では「自治会としてのマップ」づくりより「班ごとマップ」を優先しました。災害が頻発しているこの時期に、まず求められるのは、班内の助け合いです。災害時に何よりも役に立つのは班内の助け合いであるということは、証明済みです。

②住民向けサービスより住民同士の助け合い支援へシフト

自治会のあり方も変えていく必要があります。会員にどのようなサービスを提供するかよりも、班ごとの助け合いを応援することに重点を移すのです。

③マップで出てきた課題も、できる限り班に返す

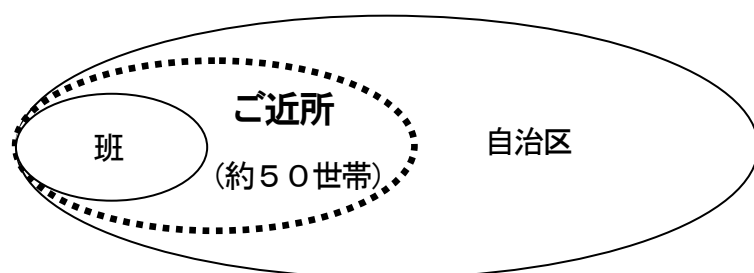
全体会議では、班内で対処しきれないテーマが出されますが、安易に引き受けず、できる限り班内の助け合いでがんばるように「押し返す」のです。

④サロンなどのイベントも班に降ろせるものは降ろす

サロンや会食会、見守り等も、自治会主催から、班ごとの実施に移行させます。

⑤班ごとに強力な福祉推進体制を

班長とは別に班内の福祉を担う態勢も作りましょう。班ごとマップで見えてきた大小の世話焼きさんたちで担ってもらうのです。任期もなし。



⑥2、3の班が合併した「ご近所」で福祉推進も

一つの班では人材が足りないという場合は、2つか3つの班が合併（合体の必要はありません）した規模で推進していくことも考えられます。人々は大体50世帯規模で助け合っていることが、長年のマップづくりで見えてきました。自治会は複数のご近所の連合体ぐらいに考えればいいのです。各ご近所での助け合いをバックアップするのが自治会の主要事業になるということです。